
災害急性期の看護の役割を焦点とした災害看護教育の方向性に関する文献検討

(長沼幸司ほか、日本集団災害医学会誌 22: 1-8, 2017)

2017年11月17日、災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

大規模災害急性期における看護師の役割を明らかにすることで、ジェネラリストとして働く災害看護を専門としない看護師の災害看護教育に必要な要素を検討した。具体的な方法としては、災害サイクルのうち超急性期および急性期に当たる時期について書かれたものかつ、災害時における看護の役割について述べられているものと分析対象としてデータを収集した。テーマに共通性のある一連の研究の成果を批判的解釈に基づいて統合し、そのテーマに対する本質を明らかにすることを目的に統合、重要であるとする言葉をカゴテリーに分けることで分類した。

災害急性期は、発災直後から 72 時間後までの活動である。災害現場において看護師には多様な役割が求められており、それを可能にする環境整備や調整について次のようなものがある。

1. 患者及び職員の安全の確保、情報収集

自分自身の身の安全確保を行う。

部署の責任者、もしくは常務帯におけるリーダーなど指揮者を明らかにする。

指揮者の指示のもと職員・患者の安全、及び被害状況などの確認を行う。

確認した結果を指揮者に報告する。

指揮者は、職員や患者、被害状況などを把握し災害対策本部に報告する。また、状況を分析して緊急避難や応援要請の必要性など現場での判断についても報告、連絡、相談する。

災害対策本部の指示、または現場の判断で必要な対応を行う。

呼吸循環の維持。

避難誘導に当たってのトリアージ

トリアージ実施の原則

2. 避難・誘導

避難路の確保や避難場所の確保。

二次避難・誘導。

3. 救急外来など多数傷病者の受け入れの初期対応

多数傷病者の受け入れ準備。

人員の再分配(初期対応組織)。

4. トリアージ・各エリアの対応

各段階でのトリアージを行う。

災害遅延死と preventable death を防止。

5. 災害対策本部

災害対策本部設置基準および設置場所を設ける。

災害対策本部組織図及び構成員を設ける。

災害対策本部の任務を作る。

6. 職員参集

自動参集の基準

7. 院外機関・マスメディアなど

情報収集と情報発信する。

このようなものがあるが、災害看護で大事なカテゴリを作っていくとすると、「情報の収集と活用」に尽力する。「リーダーを中心とした多職種連携」に看護師が貢献する。「多数傷病者への治療、看護とその調整」の役割も担っていた。また、現場の役割遂行を全うする基礎として「特定分野における看護学習」を身につけることが重要である。看護者としての使命感や倫理観を持って行動することが災害の際に被災者を守る役割に対する責任感につながるため、「災害看護に必要な姿勢」を形成していた。

本研究において看護師は直接的な治療と処置に限らず、あらゆる組織単位での連携と調整にかかわっていることが明らかになった。災害医療メンバーの中で看護師の役割は診察環境の整備が最多で、多職種チームの連携がそれに続いた。このように看護師が期待される災害急性期の訓練・教育は専門知識よりもマネジメントの面が拡大されてきていることがわかる。多職種の連携と協働を先導するという看護師の役割は、高い専門知識、技術の上に成り立つものであるが、その教育の手段には災害の種類や現場の状況で共通する技術的スキルと、状況に応じて流動的なコミュニケーションやチームワーク、リーダーシップのスキルという、異なるスキルを考慮したプログラムの体系化をもって構築していく必要がある。平時よりも不確定要素が多い災害の現場では、日常のある作業に習熟していたとしてもテクニカルな実践力を必要とするのである。処置の手順それ自体に集中せずに、周囲の状況も把握する広い視野を獲得するためには、刻々と変化する災害の現場の状況に対しても、実際の経験学習が不可欠であるのは前提といえ、災害看護という特定の知識、技術の反復練習に基づく習熟が大切である。災害看護に必要な姿勢や態度、判断のスキルは、特定の状況設定における習熟する学習、すなわち経験学習によって、拡大する看護師の専門的な役割を補うことができるのである。そしてこれらを組み合わせた教育方針によって、被災者の生活の視点に基づいたケアを看護師が中心となることで災害急性期から以降の災害サイクルへの切れ目のない実践を可能にするのである。

災害急性期での実践に限定して抽出することを試みたが、災害サイクルにおける急性期に焦点をおいて明確に実践を抽出している研究は少なく、現場救護所に特化した役割の抽出を行えなかった。今後は災害急性期に特化した実践の報告を明らかにして、経験学習の体言化を促す、実践の言語化を進めていくことが課題である。今回の研究で災害看護の教育は、従来の知識、技術の反復練習における習熟に加えて、判断・態度・姿勢を育む経験学習および多職種間の専門性を相互理解するための仕組みをいれて構築するという方向性が示されたのである。